2013年のオペラ界
～全般の展望と主な劇場、団体の活動～

関根礼子

ヴェルディとワーグナーの生誕200年に当たる2013年は、世界各地の劇場でこの2人の大家が例年以上に注目された。日本国内でも話題は大いに盛り上がり、生誕100年のブリテンや没後50年のプーランクの出番などほとんどない状態。オペラにおけるワーグナーとヴェルディの巨大さが改めて認識される結果となった。両巨匠関係の出版や映画、セミナー、部分上演などが活発に行われたなかで、本格的な全幕舞台公演の回数が多かったのはヴェルディで、内容的にも充実した成果がみられた。これは、ワーグナー作品の公演の方に主催者側の負担がより大きいという事情のほかに、この年に来日した主要海外団体が3つともイタリアからで、ドイツ、オーストリアからはゼロだったという状況を反映してもいる。すなわちフェニーチェ歌劇場は《オテロ》、ミラノ・スカラ座は《ファルスタッフ》と《リゴレット》、トリノ王立歌劇場が《仮面舞踏会》（プッチーニ《トスカ》も公演）と、イタリアの誇るヴェルディの記念イヤーにふさわしい取り組みをみせたからだ。

国内団体では特にイタリア・オペラに長年の実績を持つ藤原歌劇団が《仮面舞踏会》と《La Traviata ～椿姫～》を上演したほか、東京二期会はペーター・コンヴィチュニー演出の《マクベス》で、ラストシーンを大胆に改変するなどして異彩を放った。新国立劇場は《タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦》で新年の幕を開けたとはいえ、ワーグナーは翌2014年就任予定の飯守泰次郎芸術監督に託した形で、この年は《ナブッコ》と《リゴレット》を新制作し、再演の《アイーダ》とあわせてヴェルディ3演目を上演し、ヴェルディ・イヤーにふさわしい路線を進めた。

一方、ワーグナー・イヤーにふさわしい成果としては、東京二期会、びわ湖ホール、神奈川県民ホール他による共同制作《ワルキューレ》好演のほか、東京・春・音楽祭の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》をはじめ、演奏会形式で全曲もしくは部分上演などが多数開催された。これらに加え、ワーグナーもヴェルディも、アマチュアを含む小グループ等による公演も活発に行われた。草の根レベルで普及している証しだろう。

とはいえこの年、日本のオペラ界がヴェルディとワーグナーだけにあけくれたわけでは決してない。オペラ活動はきわめて多極化されており、西欧的伝統への志向が強い路線から前衛的現代志向、日本の伝統を採り入れた方向、はては初音ミクのボーカロイドオペラ…と実に多様な方向が混在している。状況は混沌として、専門家の評価も聴衆の趣向もまちまち。研究や趣味は細分化して、相互の交流も少ない。そうしたなかで、「本筋」といえるものがあるのか否か、あるとしたらそれは何なのかを見究めることが難しくなっている。少なくとも今は、自分が本当に好きなもの、求めているものは何なのかを見定めておくことが大切かもしれない。

演出面の革新に加えてレパートリー開拓も引き続き活発で、複数の作品が日本初演もしくは世界初演された。日生劇場は東京二期会他との共同主催でライマン・プロジェクトを推進、前2012年の《メデア》に続いて《リア》を日本初演した。歌唱超困難な作品に日本の歌手たちと管弦楽が誠実に取り組み、高く評価された。東京オペラ・プロデュースはオッ

フェンバックの《ロビンソン・クルーソー》とレスピーギ《ラ・フィアンマ》を日本初演。特に《ラ・フィアンマ》は隠れた名作の紹介として話題になった。また、新国立劇場オペラ研修所の研修公演でヒンデミット《カルディヤック》が日本初演されたのも注目された。日本作品は、新国立劇場で香月修《夜叉ヶ池》、西村朗《バガヴァッド・ギーター》など。

これらの成果を記録する2013年だが、2011年の東日本大震災からまだ2年。復興が十分進んでいないのに加えて、世界政情の悪化、経済の低迷、人口減少・高齢化の進展などにより、オーケストラやオペラ団体の経営難は一層強まっているといわれる。単に優れた演目を提供するだけでは大劇場は満席にならない傾向がすでに何年も続いており、観客のすそ野を広げる努力は必須。聴衆の趣味も多様化しているので、どのような聴衆を対象にするのかの理念も求められよう。プロフェッショナルな歌手たちにとっても、自分の実績をあげ「仕事」としてこなすだけでなく、専門家として何がやりたいのか、人々のために何がやれるのかを真剣に考え続けていくことが一層重要になっている。

新国立劇場

主催のシーズン公演は1月の《タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦》から12月の《ホフマン物語》まで10演目行われ、鑑賞教室と地域招聘、オペラ研修所の全幕公演をあわせると、本格的な舞台公演はオペラパレスで全54回、中劇場で全10回、小劇場ゼロの合計で全64回開催された。前2012年より9回の増となる。この間、バレエの主催公演はオペラパレスで5演目、全25回開催され、加えて中劇場、小劇場でもコンテンポラリーダンスなどの公演がなされた。

オペラのシーズン公演10演目の内、新制作は《ナブッコ》、《リゴレット》と《夜叉ヶ池》の3演目で、他は名作物レパートリーの再演。オーケストラは例年どおり1月から3月までのオペラとバレエの主催公演は東京交響楽団、4月以降のオペラとバレエのシーズン公演はすべて東京フィルハーモニー交響楽団が担当。オペラ研修所の《カルディヤック》にはトウキョウ・モーツァルトプレーヤーズ、地域招聘公演の《三文オペラ》にはザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団が出演した。

年間を通して振り返ると、際立って異彩を放つ公演があったとはいいがたいにせよ、プロダクションを個々にみればそれぞれに捨てがたい魅力を持っており、水準もおおむね安定している。開場15周年を迎えて、実績が着実に定着していることが実感された。

1月は《タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦》、2007年プレミエのハンス＝ペーター・レーマン演出版の初めての再演である。クリスタル感覚の抽象的な装置（オラフ・ツォンベック）は現代的だが、演出自体には特に現代化や読み替えの視点はない。来日した歌手陣はさすがに充実していて、エリーザベト（ミーガン・ミラー）、ヴェーヌス（エレナ・ツィトコーワ）の女声2役は圧巻だったし、ヘルマン（クリスティン・ジグムンドソン）、タンホイザー（スティー・アナセン）、ヴォルフラム（ヨッヘン・クプファー）の男声3役も立派。脇の日本人組みも発奮し、合唱を含めて歌唱に関してはまずまずの成果だった。これで管弦楽がもう一つ燃焼すれば胸躍る演奏となったかもしれない。指揮はコンスタンティン・トリンクス。

2月は《愛の妙薬》。2010年プレミエのチェーザレ・リエヴィ演出によるカラフルな舞台で、鑑賞教室では再演されているが、シーズン公演では初の再演となった。ジュリ

アン・サレムクールの軽妙な指揮とアントニーノ・シラグーザ（ネモリーノ）をはじめとする練達の歌手たちの好演で、喜劇オペラの楽しさが満開となった。シラグーザは舞台そのものが日常生活だと感じさせるほどの自在さでごく自然に役柄になりきっているし、ドゥルカマーラのレナート・ジローラミは笑いのツボを見事に心得た表現力で客席を幾度も沸かせた。アディーナのニコル・キャベルも好演。対して日本人歌手はまだ一生懸命演唱している段階で老練な味に至らないのが惜しく、これも舞台経験の差というほかない。

フランコ・ゼッフィレッリ演出の《アイーダ》（3月）は新国立劇場の最高のレパートリーになっている。開場記念の1998年にプレミエし、2003、2008、2013年と5年毎に再演を繰り返し、その都度満席状態だ。同劇場15周年記念とヴェルディ・イヤーが重なって、《アイーダ》ファンには大きな贈り物となった。歌手はアイーダ（ラトニア・ムーア）、ラダメス（カルロ・ヴェントレ）、アムネリス（マリアンネ・コルネッティ）の来日組が、不満もないかわり大きな魅力もなかったのに対して、アモナズロ（堀内康雄）の威厳と策略に長けたダイナミックな表現力、ランフィス（妻屋秀和）の好調の低音など、日本人組に光るものがみられた。ミヒャエル・ギュットラーの指揮と細部まで見飽きない演出によって、ヴェルディの優れた劇場感覚を再認識することができた。

4月に再演された《魔笛》も、《アイーダ》とは別の意味で同劇場の主要レパートリーの一つになっている。1998年にプレミエされたミヒャエル・ハンペ演出によるプロダクションで、2000、06、09年につぐ4年ぶりの上演。その間、シーズン公演でもほとんどすべての役を日本人歌手だけでまかなってきた、外国作品としてはほぼ唯一の演目なのである。今回も全日本人態勢で固め、少なくとも歌唱面では上々の成果をあげたと筆者には感じられた。ブラボーも多数飛んでいた。なかでもパミーナの砂川涼子は柔らかな美声と高水準の歌唱に豊かな情感がにじみ、可憐で清楚な役作りにも魅力があった。夜の女王の安井陽子も明晰な感情表現が大変見事だが、今一つ肩の力が抜けるためには舞台経験がもっと必要なのかもしれない。ザラストロの松位浩ら他の歌手たちもおしなべてしっかりと歌い、アンサンブルのすばらしさは抜群だ。さらに望むなら、動きの少ない演出だけに、ただ立っているだけでドラマを感じさせるような舞台人としての表現力を、さらに探究してほしい。指揮はラルフ・ヴァイケルト。

5月に新制作の《ナブッコ》。演出（グラハム・ヴィック）と美術・衣裳（ポール・ブラウン）はイギリス人コンビだが、舞台を飾るのはアニメ感覚のクールジャパン路線だ。内容は原作に描かれた宗派・民族間の対立や王権争奪という問題が「富裕層」と「活動家」の敵対と読み替えられ、「そのどちらもが自然の脅威にさらされて謙虚さを取り戻す」と設定されていた。場面は現代のショッピングセンターに始まり、そこに活動家らが乱入してドラマが展開する。神の偶像は巨大なキューピー人形の顔、活動家らは動物のような面を被ってマンガ風。歴史的でシリアスな舞台が多い同作としてはかなり大胆な現代戯画化で、見た目の新鮮さという点で、この年、同劇場一番の話題作となった。ただ、そうした設定が各人物像に十分な説得力を持たせるに至らず、内容が深まったとは言い難い。これは歌唱面にも責任があり、特にナブッコ（ルチオ・ガッロ）の声が不調だったのが全体に大きく響いた。なかにはアビガイッレ（マリアンネ・コルネッティ）のように、屈折した人物像を十全に歌い込んで共感を呼んだ歌手もいたのだけれど。指揮はパオロ・カリニャーニ。

6月の《コジ・ファン・トゥッテ》は2011年プレミエで初めての再演。場面を現代のキャンプ場に設定した演出（ダミアーノ・ミキエレット）は、絵としてはなかなかきれいにできているのだが、ドラマ内容がそれで維新されるわけではない。この作品が内包する「女性客の共感を得にくい」という特徴が克服されたプロダクションとは言い難いのだ。歌手では男声3役（フェルランド：パオロ・ファナーレ、グリエルモ：ドミニク・ケーニンガー、ドン・アルフォンソ：マウリツィオ・ムラーロ）が好調だった。指揮はイヴ・アベル。

6月にはまた同劇場の創作委嘱作品、香月修作曲《夜叉ヶ池》が中劇場で初演された。2010年初演の池辺晋一郎《鹿鳴館》に次ぐ、同劇場6つ目の創作委嘱作品である。（ちなみに2005年の久保摩耶子《おさん》は世界初演ではあったが創作委嘱ではないとの、劇場側からの説明である。）泉鏡花の同名の戯曲を原作に、作曲者と演出の岩田達宗が上演台本を作成した2幕物。雨乞い儀式のいけにえとして百合（砂川涼子、幸田浩子）を差し出そうとする村の為政者らに百合、夫（望月哲也、西村悟）らが反撃、結局洪水にやられて村人は死に絶える。伝説に拠りつつ、現代に通じる人間社会の混迷を示唆的に描き出した作品である。台本、作曲とも穏当な手法によっており、世界の最先端を行くだけの水準と革新性に乏しいことを批判する論調もあった半面、日本オペラの世界を幅広い聴衆に向けて地道に固めていける作品が誕生した意義は小さくない。

尾高忠明芸術監督の4年目にして最終のシーズンが10月、《リゴレット》で開幕した。アンドレアス・クリーゲンブルクによる新演出で、場面を現代のホテルのロビーや屋上に設定。各人物の内包する弱さ、残酷さ、自己検証の乏しさといったマイナス面を大胆に表現した演出が面白かった。すなわちリゴレット（マルコ・ヴラトーニャ）は過度に深刻にならない歌唱のなかに、自身も結構ワルい人物であることを感じさせ、娘の死も、自分の悪行が招いた結果でもあることを納得させた。ジルダ（エレナ・ゴルシュノヴァ）は伸びやかな高音域で胸のすくような心地よい歌を堪能させたが、同時にジルダの限界は、舞台上で残酷な男たちにいたぶられて抵抗もできず、されるがままになっている半裸の女性たち（助演者）が適切に表現していた。マントヴァ公爵（ウーキュン・キム）は危なげのない高音で、能天気な無責任男ながら性的魅力だけは抜群の人物像を楽しませた。これらはすべて作品本来の人物像であり、読み替えではなく、現代の視点からの読み深めというべきだろう。シーズンのオープニングとして、筆者には満足度の高い公演だった。指揮はピエトロ・リッツォ。

10月に再演された《フィガロの結婚》も、2003年のプレミエを含めて5度目の上演であり、定着したレパートリーの一つというべきだろう。だが、アンドレアス・ホモキ演出によるこの舞台、積み上げられたダンボールや異形の衣裳にはもう驚かなくなったものの、上演のたびに内容が深まっていくといった性質のものではないようで、その分、演奏の良否に関心が向く。充実した音楽が聴ければ問題はないのだが、今回、筆者には歌手、管弦楽とも不満の残るものだった（楽日に観劇）。来日した主要歌手4人は皆そつなく歌ってはいたものの、それ以上の魅力はない。むしろスザンナ（九嶋香奈枝）の豊かな美声とはつらつとした表現力が最も光っていたほどだ。《魔笛》ほどにはいかないにせよ、《フィガロの結婚》の場合にも、もっと日本人歌手の起用を増やしてもいいのではないか。指揮はウルフ・シルマー。

年内最後は12月の《ホフマン物語》。

2003年プレミエで2005年に次ぐ8年ぶり、3度目の上演だ。こちらは来日組と日本人組の歌手の配置、人選が適切で、楽しく観劇することができた。ホフマンのアルトゥーロ・チャコン＝クルスはメキシコ出身だが発声はイタリア式で、骨太の声がまっすぐに届く。表現の作り方は健康的で男性的。詩人の役だからといって繊細過ぎたりインテリ青年じみてはおらず、いわばスポーツマン・タイプだ。ニクラウス＆ミューズのアンジェラ・ブラウアーは美声と美貌に恵まれ、リンドルフほか3役をこなしたマーク・S・ドスは悪役ぶりに迫力がある。オランピア（幸田浩子）、アントニア（浜田理恵）、ジュリエッタ（横山恵子）らの日本人歌手も好演し、聴きごたえあった。フィリップ・アルロー演出の舞台には正体不明の幻想的趣向が入り乱れ、猥雑で遊びがあり、劇場的興奮にあふれている。指揮はフレデリック・シャスラン。

地域招聘オペラ公演として、びわ湖ホール制作の《三文オペラ》が中劇場で2回行われた。歌手はびわ湖ホール専属の声楽アンサンブルが出演。メンバーが若いだけに特にメッキー（迎肇聡）役などに求めたい複雑老獪な味は望むべくもないが、栗山昌良演出のもと、全体として歌唱も演技もきちんと整った正統派の舞台となった。特にルーシー（本田華奈子）、ポリー（栗原未和）、ジェニー（中嶋康子）の女性3人組は若い美声と歌唱力で勝負。園田隆一郎の指揮で管弦楽（ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団）は熱っぽい盛り上げは抑えつつ、ワイルならではの気だるい音楽を本当に気だるいように聴かせた。びわ湖ホールで最も水準の高いプロデュースオペラを持ってくるのでなく、あえて声楽アンサンブルの活動を全国に発信するところに、同ホールの理念が感じられた。

オペラ研修所は3月、中劇場でヒンデミットの《カルディヤック》（1926）を日本初演した。修了する13期生4人と14、15期生各人の声域やキャラクターを考慮し、加えて既成の歌手のコピーに陥るのを避けて選んだ演目という。E.T.A.ホフマンの《スキュデリ嬢》を原作に、17世紀のパリを舞台に展開する連続殺人事件。残酷な殺人シーンやサスペンス仕立ての意表を突いた劇展開などに緊張感があり、内容は示唆的で意味深い。若い研修生たちは人物像の深みを表現するには経験不足ではあっても、創意と熱意に富んだ演唱で健闘。研修所公演として立派な舞台となった。指揮は高橋直史、演出は三浦安浩。このほか7月には新入生（16期生）を加えたオペラ試演会《魔笛》短縮版を小劇場で2回公演している。演出はカロリーネ・グルーバー、指揮は天沼裕子。

高校生のためのオペラ鑑賞教室はオペラパレスで《愛の妙薬》を6回、関西公演としてあましんアルカイックホールで《夕鶴》を2回開催した。どちらもシーズン公演に定着しているレパートリーを全日本人歌手で再演したもの。関西では特に「つう」の石橋栄実をはじめ、児童合唱（百合学院小学校）、管弦楽（大阪フィルハーモニー交響楽団）と地元から多数参加した。

■（公財）日本オペラ振興会

藤原歌劇団は2月に《仮面舞踏会》、9月には《La Traviata ～椿姫～》と、この年はヴェルディに集中した。両公演ともイタリア・オペラに実績を重ねている看板歌手をメインに、音楽重視の路線で思い切り歌わせ、基礎的歌唱面での手堅い水準を維持。翌年に創立80年を控えた同団の到達点を示した。

《仮面舞踏会》では同団本公演デビューとなった若手指揮者・柴田真郁が注目されたほか、ドラマの骨格を過不足なく押さえて華麗さもある演出（粟國淳）にも無理がない。歌

手は村上敏明（リッカルド）、堀内康雄（レナート）、野田ヒロ子（アメーリア）、森山京子（ウルリカ）ら、同団のベテランたちが力のこもった歌唱で公演を支えた。

《La Traviata ～椿姫～》ではヴィオレッタにマリエッラ・デヴィーアを迎えて、佐藤亜希子とダブルを組んだ。デヴィーアは極めて正統的で非の打ちどころのない歌唱を聴かせ、高音の美しさも格別だ。その見事に柔和な歌唱に比べると、共演した日本人歌手たちの歌に、どうしても力みすぎの生硬さが感じられてしまうのは無理からぬところか。指揮は園田隆一郎。岩田達宗の演出は、オリジナル尊重の路線に従いつつも部分的に新しい趣向を加えるなど、完成度を高める工夫をみせた。

日本オペラ協会は2月、水野修孝作曲《天守物語》を上演した。このオペラは1977年にテレビオペラとして初放送されて以来、複数の団体で公演が重ねられ、日本オペラ協会だけでも7回目を迎えた。その間、作品の改訂、演出の工夫、歌唱・演奏の習熟などが少しずつ進められ、今回もこれまでの筆者の記憶と若干異なる部分があるように感じられた。すなわち上演のたびにさらなる完成度がめざされてきたわけで、オペラとしての展開が一層適切になり、桃六（大賀寛）を声のみの出演にしたことや、声と管弦楽のバランスの巧みさなど、オペラ作りの技術面での課題はほぼ解決されたといえるだろう。こうしたプロセスを持てること自体、日本作品のなかでも大変恵まれたものの一つというほかない。一方、作品のより本質的な問題として、泉鏡花の濃艶な世界と水野修孝のさわやかな情感とが十分かみ合わない面があり、歌手たちは鮮明な日本語でおおむね明晰に歌いこなしていたものの、その先にある情念の深さまではまだ表現しきれていない。演出（岩田達宗）もテーマをどう深めるのか、鋭意を一層発揮すべき段階にきているのではないか。

オペラ歌手育成部の第32期研究生新人育成オペラアンサンブル公演が3月、昭和音楽大学北校舎第1スタジオで開催された。フロトー《マルタ》とペルゴレージ《兄妹どうしで恋におち》を1回ずつ上演。器楽パートは鍵盤楽器を中心にした簡易編成、舞台装置もごく簡素な公演だが、筆者が2日目に観劇したところ、研究生たちは特にイタリア語の唱法についてはきちんと学んでいる様子で、客席は年配者の姿も多く、ほぼ満員。こうした研修公演の多くには、低料金でオペラを楽しめる場をよく知っている観客たちが集まっているのだ。

■（公財）東京二期会

創立60周年を前2012年に迎えた東京二期会は、2011年4月の《フィガロの結婚》から2013年11月の《リア》まで3年にわたる一連の「二期会創立60周年記念」11公演を実施。2013年は《こうもり》、《マクベス》、《ホフマン物語》、日生劇場他との共同制作《リア》に加え、神奈川県民ホール他との共同制作2演目《椿姫》と《ワルキューレ》にも力を込めるなど、年間を通して大変精力的な活動を行った。

2月の《こうもり》は従来の訳詞（中山悌一）に加えて演出の白井晃が新しい台本を作成、演出全般にも新しい趣向が多々こらされていて、新鮮味のある舞台となった。字幕がないためにせっかくの歌詞やセリフが十分聞きとれなかったり、少々やりすぎとも感じられる演出にへきえきした聴衆もいたようだが、オペレッタを正統的に上演しつつもここまで騒げるのは、今、東京二期会くらいかもしれない。筆者は2日目に観劇し、特に若手歌手数人が立派に伸びていることを確認した。なかでもアデーレの坂井田真実子、アル

フレードの高田正人、オルロフスキーの青木エマらは有望格。指揮は大植英次。慣例でカットされてきた舞曲が復活演奏されたのも新鮮だった。

5月の《マクベス》はライプツィヒ歌劇場との共同制作で、演出はペーター・コンヴィチュニー。ブレヒトやフェルゼンシュタインに多大な影響を受けたコンヴィチュニーの演出は、理念のしっかりしたムジークテアター路線だ。男たち（群衆）は全員が兵士、女たちは全員が魔女に設定され、ドラマは明るくカラフルな台所を舞台に喜劇タッチで進行する。最後の大詰めの音楽も決して「勝利万歳！」と喜びに満ちて盛り上げるのではなく、権力の奪い合いが果てしなく続くのを女たちが冷めた目で見つめるなか、ピット内のオーケストラは演奏をやめ、指揮者も去り、ただラジカセ（録音）の音だけが弱々しく響いて閉幕となった。戦いの無力さなど、宗教間・民族間の戦乱が続く現代におけるドラマ理解の一例として、納得できるものがある。惜しまれるのは、いつもは高い歌唱力を発揮する複数の歌手たちに、なぜか歌唱力全開の輝きが感じられなかったことだ。

そうしたなか、7月の《ホフマン物語》で筆者にとって最も喜ばしく思われたことは、男声歌手たちの実力と人材の充実だった。二期会での女声歌手は日ごろから豊富な人材と厳しい競争を経ることで比較的高い水準を維持しているのに対して、男声歌手の方は大きな期待をかけられる一方で、芸術的完成度の点で物足りなさの残ることが多かった。それがここでは男声陣がいつになく粒ぞろい。筆者が聴いたなかでは福井敬（ホフマン）、小森輝彦（リンドルフ他）、大川信之（フランツ）をはじめ、脇も合唱も男声の魅力をふんだんに楽しむことができた。《ホフマン物語》はもともと男心のオペラであり、演出（粟國淳）も歌手に無理なく歌わせる方向のものだったことなどもあって、実現したことかもしれない。むろん女声もすばらしく、木下美穂子（アントニア）のみずみずしい音楽性、安井陽子（オランピア）の聴き心地の良いコロラトゥーラ、佐々木典子（ジュリエッタ）の格調、加納悦子（ミューズ他）の的確な役づくりなど、立派な水準であった。

他の共同制作公演については別項で。また、こうした本格的なオペラ主催公演のほか、二期会所属の多数の歌手は他団体の公演や自主開催の小公演、リサイタルなどでも小オペラにひんぱんに出演し、国内の活動を支えている。6月に開かれた「二期会WEEK」で一柳慧作曲《ハーメルンの笛吹き男》やドニゼッティ《ドン・パスクワーレ》（一部カット）が上演されたのはその一例。単に歌曲やアリアを並べるだけでなく、構成を物語仕立てにすることで一段と聴きやすくなる傾向は否めないので、こうした小オペラの催しはどんどん企画してソンはなかろう。

■ 日生劇場

日生劇場はこの年、開場50周年を迎え、いくつかの記念事業を行った。オペラ公演では、「特別公演」として前2012年に《メデア》の日本初演でスタートしたライマン・プロジェクトの一環として《リア》を日本初演。さらに1963年のこけら落としでベルリン・ドイツ・オペラが公演した《フィデリオ》を同劇場50年ぶりに上演、加えて夏のファミリーフェスティヴァルでは《ヘンゼルとグレーテル》と、年間3演目を制作した。

《リア》はシェイクスピアの戯曲《リア王》を原作に、台本はクラウス・H・ヘンネベルク（ドイツ語）、フィッシャー＝ディースカウをタイトルロールに1978年、ミュンヘンのバイエルン州立歌劇場で世界初演された。ライマンの音楽は、大編成のオーケストラに

よる多彩な音色と、微分音を用いた朗唱の積み重ねにより、非常にドラマティックに、極度の悲劇性を描き出している。歌唱は困難を極め、各人物像や作品のテーマのとらえ方にも一筋縄ではいかない複雑さがあるが、全日本人によるキャスト、スタッフの誠実かつ渾身の取り組みにより、日本初演にふさわしい堅実な一歩を刻むことができ、特に専門家筋から高く評価された。下野竜也の整然とした指揮と栗山民也のドラマの骨格を無理なく伝えた演出のもと、リア（小森輝彦）、ゴネリル（小山由美）、エドガー（藤木大地）をはじめとする歌手たちの健闘を称えたい。また、一般になじみの薄い作品ということもあり、シンポジウムやレクチャー、プレトーク、記録映像上映などの催しが継続的に開催されたことも、作品理解を促すうえで大変有意義だった。（公財）読売日本交響楽団、（公財）東京二期会との共同主催。

《フィデリオ》は一連の開場50周年記念公演の締めくくりとして、同劇場単独での主催・企画・制作により、一般公演2回、学校向け公演3回の計5回がダブルキャストで実施された。歌手はベテランから若手まで各所属団体の枠を越えて幅広く起用、そうした場合にありがちな歌手間のデコボコが筆者の聴いた範囲ではさほど気にならなかったのは、人選とリハーサルが的確に機能していた証しかもしれない。管弦楽（新日本フィルハーモニー交響楽団）が精彩を欠いたのは腑に落ちないが、飯守泰次郎指揮のもと、歌手陣に破綻はない。ドイツ語は歌唱、セリフとも一様によく訓練され（原語指導：ヨズア・バールチュ）、合唱（C.ヴィレッジシンガーズ）も田中信昭の指揮で好演。賛否両論で耳目を集めたのが演出（三浦安浩）で、学校公演を意識してか若者向け劇画感覚の舞台になっていた。内容の深遠さが薄まった一方、簡明な勧善懲悪オペラとして若い世代が気軽に楽しめるものになったかもしれない。

夏のファミリーフェスティヴァルでの《ヘンゼルとグレーテル》は、約1時間半の短縮版（日本語）。眠りの精、露の精は登場しないが、オーケストラ（神奈川フィルハーモニー管弦楽団）の豊かな響きは維持されている。客席には幼児も多く、派手なアクションや繰り返しに笑い声が絶えなかった。

■ 東京オペラ・プロデュース

前2012年に引き続き、この年も2つのオペラを日本初演した。オッフェンバック《ロビンソン・クルーソー》とレスピーギ《ラ・フィアンマ》で、松尾史子代表のもと、制作の路線や活動の方向は同団なりに安定しているようにみえる。

2月の《ロビンソン・クルーソー》はダニエル・デフォーの有名な長編小説を基にしつつも、台本（E.コルモン＆H.クレミュー）はかなり圧縮され、それでも全3幕3時間半を要する。1867年、パリのオペラ＝コミック座で初演された。18世紀のイギリスで海外進出に野望を抱いた主人公が出航。絶海の孤島に打ち上げられて長く暮らすなかで、原住民とさまざまな体験をする物語だ。ヨーロッパ人が未開の島に流れ着いて異文化体験をするオペラは他にもあるが、その異国趣味と民族的・文化的優越感などは、21世紀の今日、反感を抱かせないように表現するにはそれなりの工夫が必要だろう。今回、作品の基本的たたずまいを脚色なく伝えたと思われる公演だったが、それだけに内容を貫くアナクロニズムが避けがたかった。欧米でも上演される機会は限られている理由は、その辺にもあるかもしれない。特に喜劇オペラの場合、その時代特有の発想が色濃く反映されることが多いのだ。歌唱は原語（フランス語）、セリフは日本語（字幕つき）。

一方、7月の《ラ・フィアンマ》も魔女狩りという歴史上の問題を扱った作品だが、テーマはそこにとどまらず、日常生活に潜むさまざまな情念を複層的に燃え上がらせるなかで、抑圧された人間性の解放と悲劇的運命を巧みに描いて、普遍性がある。台本（C.グアスタッラ）の的確さと共に、音楽も各場面それぞれの感情の高まりをドラマティックに、時に美しく表現して訴える力は強い。指揮（石坂宏）とオーケストラ（東京オペラ・フィルハーモニック管弦楽団）、持てる力を最大限発揮した歌手たちの健闘を称えたい。1934年、ローマ・オペラ座で初演された作品で、レスピーギにこのようなオペラがあることを知った喜びは大きい。

オペラシアターこんにゃく座

1971年の結成と同時に学校巡回公演を開始、以後、紆余曲折を経ながらもこんにゃく座は42年目を迎えた。引き続き学校、子ども劇場などの全国巡演を年間約250回こなしながら、この年は新作オペラを2つ初演した。2月の《アルレッキーノ》と8月の《銀のロバ》で、どちらも林光亡き後ただ一人の座付き作曲家となった萩京子の作品である。そのため作曲法としては似ているのだが、台本内容や表現方法の違いが各作品それぞれに大きく反映され、同座が育んできた有意義な芸術的路線が二つ、結実した感がある。

《アルレッキーノ》は副題に「二人の主人を一度に持つと」とあることからもわかるように、18世紀イタリアの劇作家ゴルドーニの戯曲に基づいている。コメディア・デラルテの登場人物の一人であるアルレッキーノをタイトルロールに、演出の加藤直が台本化し、道化芝居の音楽劇、すなわち「道化オペラ」といえる作品に仕立て上げた。内容の分かりやすさ、時間およびドラマ配分の的確さ、4人のザンニ（青木美佐子ほか）のつかみどころのない面白さ、風刺と笑いなど、いろいろな面でよく出来た演目と思われ、筆者は大変楽しく観劇することができた。加藤直とこんにゃく座とのほぼ30年におよぶ真摯な共同作業を通じて到達した一つの得難い成果といえよう。今、日本にオペレッタを上手に聴かせる歌手は一定数育ってきたとはいえ、こうした道化オペラを群集劇としてこなせる集団はほかにない。

もう一つの《銀のロバ》は、がらりと趣向の違う作品で、素朴なものを素朴なままに表現することで深い感銘をもたらすという、皮肉や風刺とは一見対局にある、こんにゃく座の持つもう一つの優れた表現力を照らし出していた。原作はオーストラリアの作家ソーニャ・ハートネット（1968～）の同名の小説（2004）。子どもたちが森の中で一人の脱走兵に出会い、逃亡を助けるなかでさまざまのことを学ぶ。児童書として決して短くはない原作を、台本（いずみ凛）は約1時間40分の一幕物として、実に適切に構成。子ども特有の視点と発想を生かして明るく生き生きと綴られ、内容も深い。無駄なコトバはなく、自然体の歌と重唱、セリフ部分とがさわやかなピアノに支えられながらテンポよく進む。演出（恵川智美）も的確で、これも同座の新しいレパートリーとして良く出来たものといえる。

オペレッタ

（財）日本オペレッタ協会は、35周年特別公演としてヨハン・シュトラウスⅡの《ヴェニスの一夜》を公演した。2004年にフェルゼンシュタイン版の日本初上演として行った舞台の再演で、ハンガリーからヴァーラディ・カタリンを指揮・音楽監督に招いての訳詞（滝弘太郎、田辺秀樹）上演。内容はカー

ニヴァルの無礼講に乗じて一夜のアヴァンチュールを楽しもうというもくろみに、まじめな恋や就職運動などのもろもろがからむドタバタ劇。日本人の生活感覚とはかなりかけ離れた面がありつつも、日本の歌役者だけでこうした舞台が成立できるようになったところに、同協会35年の蓄積がある。だが、同協会はこの公演を最後に財団法人を解散、その後はNPO法人にする予定だが、財政上これだけの規模の公演は以後できなくなるという。日本オペラ界の比較的恵まれた時代の終焉を感じさせる出来事で、オペラ団体存続の厳しさに改めて思い至らされた。

とはいえ、演出家・寺崎裕則が35年間率いた日本オペレッタ協会が活動の縮小を余儀なくされる後も、そこで育ったスタッフ、歌手、聴衆らは生き続ける。演出家・角岳史らを中心とする**東京オペレッタ劇場**はその一つで、数年前から小規模でのオペレッタ公演を続け、この年も東京で《メリー・ウィドウ》と《ジェロルスタンの女大公》、別府市で《魔笛》などの公演をした。独自に短縮版（日本語）を作り、器楽は1～2人程度、簡素な舞台で経費を極力抑えながら実力派の歌手をそろえて、手軽な料金で上質のオペレッタを提供するのが特長だ。なかでもオッフェンバックの《ジェロルスタンの女大公》は大正時代、浅草オペラで《ブン大将》という題名で親しまれた作品でもあり、針生美智子（大公）、里中トヨコ（ワンダ）、女屋哲郎（ブン）、澤村翔子（ポール）らが高水準の舞台を楽しませた。このほかにもオペレッタ系の小グループの活動は最近各所で盛んになっているが、惜しまれるのは宣伝不足で情報が広がりにくいこと。宣伝費をかけられない事情があるにせよ、改善の余地はあろう。

共同制作

複数のホールが参加した国内の共同制作で見事な成果をあげた活動に、神奈川県民ホール、びわ湖ホール、東京二期会、神奈川フィルハーモニー管弦楽団らによる公演がある。3月に京都市交響楽団を加えた5団体で《椿姫》、9月には日本センチュリー交響楽団を加えた5団体で《ワルキューレ》を上演。ダブルキャストで劇場の音響条件にも差があるため一概にはいえないにせよ、筆者は両演目とも神奈川で観劇し、《ワルキューレ》にとりわけ大きな感銘を受けた。

《ワルキューレ》は歌唱、演奏の充実に加え、ジョエル・ローウェルスの新演出にみられた作品内容への積極的な探究に興味がそそられた。ローウェルスは2008年にも東京二期会で《ワルキューレ》を演出しているが、その折にみせた具象的で詳細なドラマ表現の手法を生かしつつも、今回は黒幕をひんぱんに降ろして短いシーンをつなぎ合わせる映画の手法を用いて昔語りのイメージを強調。ヴォータン（グリア・グリムズレイ）や車椅子のフリッカ（加納悦子）らはたそがれ途上の神々であっても、愛を知り、旧来の掟を破ったブリュンヒルデ（エヴァ・ヨハンソン）に人間社会発展への期待を感じさせる前向きの演出だったことを評価したい。沼尻竜典の指揮で2団体合同の管弦楽も好演。これだけの事業を成しえたのは、団体単独の主催でなく、より規模の大きい共同制作だったからにほかならない。

《椿姫》は2010年にボローニャ歌劇場でプレミエされたアルフォンソ・アントニオッツィの演出によるプロダクションが、同歌劇場の協力で再現されたもの。声楽家出身の演出家らしく、歌手を歌に専念させるアイディアがいくつか見られた。特にラストシーンで歌うヴィオレッタと死にゆくヴィオレッタを

分身で表現したのがユニークだったが、それによって作品理解が深められたかは疑問。音楽面ではヴィオレッタ（安藤赴美子）、アルフレード（フェルナンド・ポルターリ）らが好演した一方、全体の燃焼度に物足りなさも残った。

■ ホール主催の事業

大規模の共同制作とまではいかなくても、ホールや行政系法人によるオペラ事業は比較的堅調だ。アーティスト系オペラ団体の多くが財政悪化のために事業縮小などを余儀なくされているなか、一般的な財政状況の厳しさは共通するにせよ、各ホールでは簡略化された公演や新手の企画、ワークショップなど、既成の枠にとらわれない創意工夫が多様に試みられている。個々にはさほど大きな事業ではなくとも、寄せ集めてみると、なかなか活気に富んでいる。

たとえば豊島区制施行80周年記念事業として初演されたオペラ・コミック《君と♡見る夢》は、(公財)としま未来文化財団・豊島区の主催により東京芸術劇場プレイハウスで開催された。涙と笑いの現代結婚事情を描くなかで、家族の大切さや身近な人の愛と優しさを見直すといった内容で、台本（高木達）はドラマ作法と歌詞の作り方が巧く、作曲（吉岡弘行）では挿入された多数の名曲のパロディーが笑いを誘う。坂本和彦の音楽監督・指揮のもと、川越塔子（デパートガール斉藤和美）、井ノ上了吏（その恋人・木島雅夫）らオペラ歌手が出演、一般応募の合唱団、学生有志中心の管弦楽もしっかりと役割を果たしていた。

古楽演奏と普及に実績のある北とぴあ国際音楽祭2013で、北区文化振興財団設立25周年記念として《フィガロの結婚》がセミ・ステージ形式で上演された。寺神戸亮の指揮、オリジナル楽器による管弦楽レ・ボレアードの演奏はこれまでと変わらないが、一部にピッチのそろわない歌手がいるなど、やや統一感を欠く演奏となったのが惜しまれる。最も聴きごたえあったのはスザンナを歌ったロベルタ・マメリで、声をあやつる自在さや、歌と演技がダイナミックに一体化した劇的表現力は際立って見事。日本人では波多野睦美のケルビーノに個性的な魅力があった。

東京芸術劇場（(公財)東京都歴史文化財団）では5都市共同制作のシアターオペラ《カルメン》を2月、単独主催のコンサートオペラ《青ひげ公の城》を9月に開催した。《カルメン》を共同制作した5都市とは、東京のほか石川、福井、富山、名取（宮城県）と普段オペラ公演の少ない地域が大半。普及という点で大変有意義な事業に違いない。ビギナーの聴衆を意識してか、内容の分かりやすさが意図され、歌手の魅力が積極的に打ち出されたキャスト選定だったと思う。舞台では原語と日本語が混在して飛び交い、双方に字幕がある。演出（茂山あきら）は場面を19世紀のマニラに設定、密輸団をレジスタンス仲間に変えるなどの工夫をみせた。カルメン（ジュゼッピーナ・ピウンティ）は2幕以降で実力を発揮して立派だった半面、女性像としてはどこかおとなしい大和なでしこタイプ。そのためドン・ホセ（ロザリオ・ラ・スピナ）の押しの強い表現が前面に出て、作品のタイトルを《ドン・ホセ》と変えた方がふさわしいまでの迫力が出た。それはそれで面白いけれど、カルメン・ファンには不満かもしれない。エスカミーリョ（ダニエル・スメギ）はホセとの決闘シーンで劇中最高に緊張感を高め、ミカエラ（小川里美）は別世界から紛れ込んだ妖精の雰囲気。レメンタード（ジョン・健・ヌッツォ）は同役にはもったいないほどの歌唱力だった。

《青ひげ公の城》では、井上道義指揮、東京フィルハーモニー交響楽団の演奏で前半にオッフェンバック（ロザンタール編曲）のバレエ音楽《パリの喜び》抜粋を演奏。その明るく楽しい雰囲気は後半のオペラにも多少引き継がれ、過度の深刻さが避けられた。ハンガリーから招かれた二人の歌手（コヴァーチ・イシュトヴァーン、メラース・アンドレア）は役柄を十分に歌いこなして見事。

（公財）東京都歴史文化財団は、東京文化会館でも「オペラBOX」《カルメン》ハイライトを小ホールで上演。主催する東京音楽コンクール入賞者に出演の場を提供したほか、地元商店会との提携などで成果をあげている。

東京文化会館が共催する**東京・春・音楽祭—東京のオペラの森2013—**（同実行委員会主催）では一か月にわたって多彩な催しが繰り広げられたなか、オペラの全幕上演としては演奏会形式による《ニュルンベルクのマイスタージンガー》が東京文化会館大ホールで2回、簡単な演出とピアノによる《ファルスタッフ》が上野学園石橋メモリアルホールで1回、開催された。《マイスタージンガー》はセバスティアン・ヴァイグレの指揮、NHK交響楽団の演奏で歌手には内外の有力派、合唱は東京オペラシンガーズという魅力的な布陣。なかでもヴァルターを歌ったクラウス・フロリアン・フォークトは、自身としては最高の歌唱ではなかったにせよ、明るく輝かしい声で絶大なる華となったのが忘れがたい。《ファルスタッフ》ではタイトルロールの吉川健一、アリーチェの大山亜紀子、ナンネッタの馬原裕子らが健闘、演出の田口道子がナレーションを入れながら分かりやすく進めた。

サントリーホールでは、（公財）サントリー芸術財団主催のサマーフェスティバルで、アンドレ・プレヴィンが劇作家トム・ストッパードとともに作った「俳優とオーケストラのための作品」《良い子にご褒美》を日本初演した。反体制運動で逮捕された活動家が精神病患者として収容される病院を舞台に展開する内容で、形式としてはセリフで進む音楽劇。劇中に歌らしきものは唯一、思想犯の子どもサーシャ（堀川恭司）が反復する単純なフレーズのみだ。一方でオーケストラ（東京交響楽団）の表現力は大きく、諧謔的で、正常と異常の境界に切り込んでいく。劇内容への衝撃とともに、演劇を深める音楽の力について考えさせる異色作だった。また、サントリーホールオペラ・アカデミー20周年記念公演として、同ホール主催で《コジ・ファン・トゥッテ》をブルーローズ（小ホール）で。園田隆一郎指揮、田口道子演出で吉田珠代（フィオルディリージ）らが出演した。

シアターX（カイ）は毎年夏恒例の《あえて、小さな『魔笛』》が6回目を迎えた。演出態勢が変わり、音楽監督兼編曲の天沼裕子が兼務。長大な原作をきわめてコンパクト（約70分の一幕構成）に改編する手腕は見事な半面、ドラマ内容への切り込みの鋭さは減少した。このほか若手歌手のためのパフォーミングアーツ塾公演《コジ・ファン・トゥッテ》も。

大学でのオペラ活動

声楽教育の行われている大学の多くでは継続的にオペラ公演が開催される例が多い。特にこの年は文化庁の事業などもあり、大学オペラにいくつか注目される成果があった。筆者が観劇したなかから、首都圏の事例を少しご紹介したい。

東京藝術大学では、例年と同じく大学構内の奏楽堂で《秘密の結婚》を2回公演した後、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」として新国立劇場オペラパレスでも2回公演した。後者を観劇したところ、最近の藝大オ

ペラのなかでは画期的ともいえるまでにしっかりした公演だった。ステーファノ・マストランジェロの的確な指揮のもと、院生中心の歌手たちは皆、端正に歌って危なげがない。いつもは波がありがちな男声歌手たちも驚くほど立派な歌唱。チマローザの様式感を魅力的に伝えていた。演出は松本重孝。

《秘密の結婚》は**洗足学園音楽大学**でも取り組まれ、こちらは文化庁委託「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」として学内の前田ホールで開催された。松下京介指揮、ダリオ・ポニッスィ演出で、歌手はすでに現場で活動している若手を洗足学園出身者に限らず、広く起用。歌唱、管弦楽（SENZOKUオペラ管弦楽団）ともしっかりした演奏を聴かせ、舞台もそれなりに美しく作られて、劇としても楽しく観劇することができた。

昭和音楽大学によるヴェルディ《オベルト～サン・ボニファーチョ伯爵》も、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」として開催されたもの。指揮（ダンテ・マッツォーラ）、演出（マルコ・ガンディーニ）ほか主要スタッフ、指導陣にベテランを迎え、学生、OB、教師らが大船に乗ったかのように導かれて、大学オペラにふさわしい正統路線で健闘した。音楽、劇内容とも大層分かりやすく表現されていたのを評価したい。

国立音楽大学では、音楽研究所のオペラ演奏研究部門2012年度公演として1月に同大講堂大ホールで開催された「ニーノ・ロータ：珠玉のラヂヲ・オペラ初演」がユニークだった。同研究所が前2012年に日本初演した《ノイローゼ患者の一夜》に今回初演の《内気な二人》をあわせ、ロータがラジオ放送のために作曲した2作を完全な形で日本初演したもの。歌手は同大の教師陣を中心に、合唱、管弦楽には学生が参加。風刺の効いた作品を、楽しく観劇することができた。

このほか**上智大学**創立100周年記念事業として、ヨハン・ベルンハルト・シュタウト作曲《勇敢な婦人～細川ガラシャ～》（1698）が、豊田喜代美らの出演で蘇演された。このオペラは他の主催により、国内各地で複数回上演されている。

■ その他の団体など（東京）

東京室内歌劇場は6月、「一般社団法人東京室内歌劇場」を設立して再出発した。2011年に公的助成金の不正受給が文化庁から発表され、2億円以上の返還請求をされた任意団体の東京室内歌劇場（1969年設立）を母体としている。そこから全事業の委託を受け、オペラ、コンサート、カルチャー教室、セミナー、制作請負などの業務を行う団体として新たに発足したもの。むろん文化庁等への返還も引き継ぎ、一部開始した。正会員は声楽家を中心に330人を越え、代表理事・太刀川リエ（悦代）のもとに、簡易な形態でのオペラ公演をいくつか開催。「東京室内歌劇場スペシャルウィーク2013」でオッフェンバックのオペレッタ《市場のかみさんたち》、三枝木宏行作曲の新作オペラ《なりひら・こぉど》《鰍沢綺譚》、コンサート・オペラ《ヘンゼルとグレーテル》、《コシ・ファン・トゥッテ》、邦人作品シリーズ第1回として《昔噺人買太郎兵衛》と《炭焼姫》など。筆者の観劇した範囲では、会員を中心に出演して特に傑出した歌唱などは聴けない半面、出演者は積極的に舞台に立ち、宣伝が行き届いたとはいいがたい状態にもかかわらず動員は上々、客席からは温かく応援する雰囲気が感じられた。少なくともここにはオペラをやりたい歌手やスタッフがいて、小規模オペラを楽しみたい観客層がいる。多額の返還金を抱えながらの活動には計り知れない困難があろうが、社会的な信頼回復ができるように活動を進めてほしいと願わずにいられない。

室内オペラの究極の形は「絨毯1枚のスペースでも上演できるオペラ」だろう。labo opera絨毯座はそれをモットーに2005年設立され、演出家・恵川智美代表のもとに数々の実践を重ねてきた。この年は「実験室vol.6」で大変ユニークな《ドン・ジョヴァンニ》が出現した。ドンナ・エルヴィーラを男性（黒田博）が演じるもので、女形ムードのこの世ならぬ美女が誕生した。歌は、バリトンの声のまま歌った部分が後半に多少あったのみで、大半はほとんど常に二人一組で行動する侍女（大隅智佳子）が、主人の気持ちを代弁する形で歌った。喜劇性の強調された演出（太田麻衣子）を、トップクラスの歌手たちが余裕の歌唱力で演技を含めて楽しんでいると感じられる舞台。こうした「遊び」ができるのも、小規模オペラならではの利点だ。

専門性の高い上演活動も小グループ中心に熱心に行われた。たとえば古楽演奏グループのアントネッロ（1994年結成）は、オペラ・プロジェクト「オペラ・フレスカ」をスタート、年内にモンテヴェルディの《ポッペアの戴冠》と《オルフェオ》を上演した。濱田芳通の音楽監督・指揮、彌勒忠史の演出で、上質の公演が評判となった。

ヘンデル・フェスティバル・ジャパンは第10回公演に、ヘンデルの《アルチーナ》HWV34を演奏会形式で上演。ヘンデル研究家・三澤寿喜の指揮で野々下由香里（アルチーナ）、波多野睦美（ルッジェーロ）らが出演、講演会とあわせてヘンデル研究と普及を推進した。

日本ロッシーニ協会は、《マオメット2世》を抜粋で上演、天羽明惠（アンナ）、中井亮一（エリッソ）など、こちらも有力な歌手が出演しており、研究と実践を一歩深めたに違いない。

新作初演もいくつかあった。多数の企業の特別協賛と協賛を得て華やかに開催されたのは、三枝成彰作曲《KAMIKAZE―神風―》。朝日新聞社と（株）メイ・コーポレーションの主催により、東京文化会館大ホールで3回の開催。特攻隊員のオペラを書きたいという作曲者の熱意と実行力が結実した意欲作で、原案・原作は堀紘一、脚本は福島敏朗、史実監修に大貫健一郎。内容は反戦というよりはむしろラブストーリーで、悲惨な時代の運命のなかで特攻隊員らの苦悩した姿や、愛が引き裂かれた悲劇が描かれている。分かりやすい音楽で、時に激しく、時に情感豊かに進むのだが、歌唱パートでの高音域の過度の強調、ワンパターンになりがちな表現、管弦楽（新日本フィルハーモニー交響楽団）と歌が同時にボルテージを上げるなど、作曲にはさらなる推敲が望まれる面があり、再演の機会には改訂を期待したい。大友直人の指揮で、ジョン・健・ヌッツォ（神崎光司少尉）、小川里美（婚約者・土田知子）らが立派な声を聴かせた。

北沢方邦が主催する（一財）知と文明のフォーラムの委嘱により、簡単な舞台表現を加えた演奏会形式で初演された西村朗作曲の《バガヴァッド・ギーター》は、別の意味での注目作だった。全一幕、9章から成る約90分の室内オペラだが、オペラというよりオラトリオ的な表現ではある。《バガヴァッド・ギーター》とは古代インドの長編叙事詩《マハーバーラタ》の第6巻の題名で、サンスクリット語で「神の歌」という意味。原作台本を書いた北沢は、ヒロシマ・ナガサキ・フクシマの大惨事を経た今、この「神の歌」の真理の声を現代によみがえらせることで、悲劇を克服する道を探りたいという趣旨の文章を書いている。登場する歌手は、悩める戦士アルジェナ（加賀ひとみ）と戦いを鼓舞するクリシュナ（松平敬）の2人。7人の打楽器アンサンブル（上野信一＆フォニックス・レ

フレクション）がシリアスな宇宙的響きで根源的な真理を探究する。難解な作品ではあるが、「3・11」を経た現時点での、オペラ界での最も真摯な探究の一つに違いない。

各オーケストラ主催のオペラ公演も、演奏会形式で複数開催された。東京都交響楽団はエリアフ・インバルの指揮で海外から歌手を2人招いて《青ひげ公の城》、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団は矢崎彦太郎の指揮でプーランク《カルメル派修道女の対話》、東京交響楽団は大友直人の指揮で千住明作曲の《万葉集》など、指揮者の理念や得意分野に迫った企画が並んだ。

神奈川

神奈川県民ホールによる他の劇場、団体との共同制作《椿姫》と《ワルキューレ》については、すでに記した。同ホールが制作・主催の重要な一翼を担ったプロダクションであり、同時に横浜という地域性を大きく越えた全国区の活動としての地位を確立している。このほか同ホールでは、首都オペラ設立25周年記念のトマ《ハムレット》を共催で公演。上演機会の少ない同作に、岩村力指揮、佐藤美晴演出、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、首都圏の声楽家らが鋭意取り組んだ。

横浜シティオペラは創立30年を迎え、ガラコンサートのほかメノッティ作曲《アマールと三人の王様》を関内ホール・大ホールで上演した。ピアノ（服部容子）による上演ながら演出（中村敬一）をきちんとつけ、訳詞（中村）も新しく作ってのしっかりした舞台。佐藤宏充の指揮でアマール（東実和）、お母さん（柳澤涼子）らが好演した。

KAAT神奈川芸術劇場では「隅田川二題」として、ブリテンの《カーリュー・リヴァー》を日本舞踊・清元《隅田川》と併せて上演した。二つを続けて観劇し、筆者は完成度の高い清元の舞台を大いに堪能した半面、オペラの方には不満が残った。これは《カーリュー・リヴァー》の演出・振付を花柳壽輔が担当し、歌手は演技をせずに歌うだけ、所作は日本舞踊で表現されていたことと関係があろう。狂女の鈴木准は明晰な日本語歌唱で好演したのだが、ブリテンの音楽に踊りがしっくり噛み合わないなど、作品の特性が十分発揮されなかった面がある。

横浜みなとみらいホールでは開館15周年記念として、パーヴォ・ヤルヴィ指揮、ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団によるベートーヴェン《フィデリオ》をコンサート形式で上演、有力歌手を招いた高水準の演奏が評判を呼んだ。ブレーメン音楽祭、ボン・ベートーヴェン音楽祭との共同制作。

よこすか芸術劇場で、ヨコスカ・ベイサイド・ポケットで継続されている「オペラ宅配便シリーズ」が人気を呼んでいる。この年は第11回でメノッティ《アメリア舞踏会へ行く》を彌勒忠史の企画・演出で原語上演。アメリア（鵜木絵里）の行きたがっている舞踏会を1970年代のディスコに設定、現代感覚の若者風俗で、作品の持つパロディーや風刺精神を大胆に効かせて会場に笑いを充満させた。

藤沢市民会館が開館45周年を迎え、全国の市民オペラの嚆矢となった藤沢市民オペラも創立40周年となった。その両方を記念しての《フィガロの結婚》。藤沢市文化担当参与として活動を支えてきた畑中良輔亡き後、中村健を総監督に迎えての第22回公演である。企画などの路線はしっかり定着しているようで、キャストは藤沢オペラコンクールの出身者と東京二期会が半々、合唱と管弦楽は地元のアマチュアという陣容。モーツァルトともなると実力の如何がごまかせずに出てしまうが、特に合唱はよく訓練されてピアニッシモがきれいにそろい、舞台姿も生き生きと

して市民オペラ特有の活気を伝えていた。歌手ではスザンナの半田美和子が特に光っていたほか、東京二期会の本公演ではなかなか聴けない歌手たちの舞台に接することのできる貴重な場でもあった。

埼玉、栃木

和光市民文化センターが開館20周年を祝い、サンアゼリア国際芸術祭を開催、その一環としてオペラ彩の《マクベス》公演が開催された。オペラ彩も創立30年を迎えている。マクベス夫人の出口正子は幕が進むにつれて本来の歌唱力を発揮、的確な演技力、舞台姿とともに立派に役割を果たした。男性同士の対立はマクベス（三塚至）、マクダフ（秋谷直之）、バンコー（大澤健）らによってしっかりと歌われ、管弦楽（アンサンブル彩）も好演。合唱は前回よりさらに充実してきており、これだけの水準の公演を郊外で実現できるのは見事というほかない。指揮はヴィート・クレメンテ。

同芸術祭ではまた実行委員会による童謡詩劇《うずら》を再演。和光市ゆかりの詩人・清水かつらの半生を描いた音楽劇で、脚本・作詞：新井鷗子、作曲：和田薫。一流のオペラ歌手を複数起用し、オーケストラは2管編成、合唱団は大人数と、音楽面が大変豪華に作られている。その割に内容がシンプルなのがやや不釣り合いでもあるが、おそらく企画にオペラ志向が強く、だがそれを具体化する制作に不慣れな面があったのではないかと思われる。

足利市民会館で新しいオペラ活動が始動している。専属のプロフェッショナル芸術団体として「足利カンマーオーケスター」「足利ミュージカル」と同時に「足利オペラ・リリカ」が発足、その記念に《蝶々夫人》が開催された。第2回足利市民オペラでもある。時任康文の指揮、直井研二の演出で、大隅智佳子（蝶々さん）、内山信吾（ピンカートン）らを中軸に、首都圏の歌手と市民合唱団、足利オペラ・リリカ・アンサンブルが出演。当然ながらまだ基礎固めの段階だが、長期的視野を持つ「学校」の構想に期待が持てる。

長野

サイトウ・キネン・フェスティバル松本2013で、ラヴェル《こどもと魔法》《スペインの時》が上演された。グラインドボーン音楽祭との共同制作で演出はロラン・ペリー。キャストにはイザベル・レナード（こども、コンセプシオン）を筆頭に十分力のある歌手が海外から招聘されており、水準は高い。療養中だった小澤征爾は《こどもと魔法》で指揮に復帰、管弦楽（サイトウ・キネン・オーケストラ）から精妙な響きを引き出して、音楽を柔らかく開花させた。《スペインの時》は予定どおりステファヌ・ドゥネーヴが指揮し、スペインの情熱を魅力いっぱいに高揚させた。2演目を通して、ほとんど同じ歌手たちが雰囲気のガラリと違う役柄をこなした芸域の広さには、プロなら当然の技量かもしれないが、感嘆させられた。同フェスでは《ヘンゼルとグレーテル》抜粋版も公演している。

まつもと市民オペラ第4回公演は《カルメン》の日本語上演。演出の加藤直が新しいセリフを作り、大勝秀也指揮のもと、首都圏の歌手、市民による合唱団、松本室内合奏団の演奏で健闘、カルメン（腰越満美）をはじめ、まずは等身大の人物群像を作り上げた。松本発信オペラの新しい顔として定着しつつあるようだ。

愛知

（公財）愛知県文化振興事業団は「あいちトリエンナーレ2013」のメイン事業の一つとしてプロデュースオペラ《蝶々夫人》公演を行った。筆者は残念ながら観劇できなかったが、蝶々さんの安藤赴美子、ピンカートンのカルロ・バッリチェッリら国内外の有力な歌手を集めた高水準の演奏、田尾下哲演出の美しい舞台など、内容の豪華さが伝えられている。

同事業団との共同主催で（一社）名古屋二期会が《セヴィリアの理髪師》。園田隆一郎指揮のもと、合唱（名古屋二期会合唱団）、管弦楽（名古屋二期会オペラ管弦楽団）とも訓練の成果を発揮して、ロッシーニの様式感を整然と聴かせた。広大な舞台空間を隙間なく満たした演出（中村敬一）と共に、とかく持て余し気味の愛知県芸術劇場大ホールにふさわしいといえるだけのスケール感を打ち出しえたことは立派。各所に向上意欲のうかがえる公演で、歌手では特にアルマヴィーヴァ伯爵の中井亮一が、華麗なアリアを聴かせて注目された。

（公財）名古屋市文化振興事業団は地域の人材をオーディションで選んで、オペレッタ《こうもり》を名古屋市青少年文化センター・アートピアホールで。前2012年のミュージカル《シンデレラ》でも感じられたことだが、30年近く継続されてきた事業だけに、人材や制作に向上がみられ、これまでに観劇した同事業団のオペレッタのなかでは最も良い出来だったように思う。ただ歌手は、ロザリンデの日比野景をトップに皆健闘していたものの、筆者の観劇した日が3日間で昼夜連続5公演の最終日（シングルキャスト）だったため、声に疲労が目立つ歌手が少なくなかった。オペラ、オペレッタ、音楽劇、ミュージカルと多種の制作を手掛ける事業団だけに、今後は個々の特性に応じた制作が望まれよう。

名古屋オペラ協会は創立30周年記念の日本オペラシリーズNo.24として、中島基晴総監督のもと、倉知竜也の指揮で木下牧子作曲《不思議の国のアリス》をコンサートホールで演出（池山奈都子）つきで上演。また、オリジナル楽器による名古屋バロックオーケストラ（2010年活動開始）が、やまのて音楽祭2013の主催でヘンデルの《セルセ》、アマチュアの合唱団と管弦楽団の力を結集した観のあるワーグナープロジェクト名古屋実行委員会他によるコンサートオペラ《パルジファル》、新しいうたを創る会による西村朗作曲《清姫―水の鱗》など、いくつかの注目すべき動きがあった。

豊橋市のアイプラザ豊橋大ホールで三河市民オペラ《トゥーランドット》が開催された。前回2009年の《カルメン》と同じく、ただならぬほどの熱気と気迫に包まれているのがここの特色で、その勢いで難作《トゥーランドット》に挑戦。主要キャストはオーディションで選ばれたプロだが、市民参加の合唱、管弦楽、助演などは、技術面では限界を感じさせつつも、それをしのぐ気力で舞台を盛り上げる。芸術的完成度はイマイチながら、このアマチュアリズムの勝利は、共演した専門家にも良い影響を与えていたようだ。

広島

ひろしまオペラ・音楽推進委員会によるひろしまオペラルネッサンスはヴォルフ＝フェッラーリ《イル・カンピエッロ》。各歌手の力に応じて楽譜にしっかりと向き合い、音楽の様式感とヴェネツィア方言を含むイタリア語の歌詞をきちんと歌いこなしている。正確に歌おうとして守りに徹した安定感がある半面、表現にいささか伸びやかさが不足し

た面もある。とはいえ佐藤正浩の指揮で音楽の軽妙な味が浮き出されて、喜劇的な人間模様を楽しませた。客席の反応は上々で、超名作ばかりでなく、こうしたやや地味な演目をそれなりに楽しめる客層が育っていることを実感させた。演出は粟國淳。

広島ではこのほか、広島シティーオペラ第5回記念公演《トゥーランドット》、広島オペラアンサンブル《アマールと夜の訪問者》、ひろしまオペラルネッサンスのオペラ・ミニコンサート《チップと彼の犬》《ザネット》《子どもと呪文》、MAYA OPERA PRODUCE第13回公演《天国と地獄》ほか、いくつかの公演が行われた。

徳島、長崎、鹿児島

全国的な話題になるものは多くないとはいえ、四国、九州、沖縄でも年間を通じて複数の公演が開催されている。筆者の観劇したなかからご報告すると、まずNPO法人「オペラ徳島」がこのところ比較的好調を維持している。第16回《愛の妙薬》を全国公募のソリストと地域の合唱団、管弦楽団とで原語上演。広島から参加した乗松恵美（アディーナ）らが好演した。

長崎県オペラ協会が第35回定期で初演した新作《いのち》は、同地でのオペラ活動に長く関わってきた指揮者・星出豊の約20年に及ぶ構想・準備過程のもとに実現した大きな事業である。被爆体験を通して平和への祈りを描いた作品で、プッチーニの《蝶々夫人》を重要なレパートリーの一つにしてきた同協会に、世界にまたとないもう一つの大切なレパートリーが誕生したことになる。台本は、被爆者らの手記などをもとに星出が構成。作曲は錦かよ子で、題材は重いが、音楽が過度に暗くなることはなく、素朴な市民感覚が適切に生かされていた。

鹿児島オペラ協会は南日本音楽祭で《魔笛》を日本語上演。総合的にみて歌唱水準には一層の研鑽が望まれるが、くだけた歌詞や演技、方言を生かしたイントネーションなどで娯楽として観客を楽しませてしまう手腕はなかなかのもの。次世代の若手声楽家を個々にみれば、何人かはそれなりに育っていると思われるので、アンサンブルの練磨が一層望まれる。

北海道、宮城

札幌では、引き続き「さっぽろオペラ祭」が実施され、札幌市教育文化会館小ホールで北海道二期会の木下牧子作曲《不思議の国のアリス》、札幌オペラスタジオ20周年記念公演《秘密の結婚》、北海道教育大学・実験劇場《バスティアンとバスティエンヌ》、子どものためのオペレッタワークショップ発表公演で岩河智子作曲《小人の靴屋》などが開催された。ほかにレクチャー、ワークショップ、公開講座などが年間を通して催され、オペラへの継続的な取り組みがなされている。

そうしたなか、（公財）札幌市芸術文化財団による「子どものためのオペレッタワークショップ」が10年を迎え、2014年3月発行の『子どものためのオペレッタワークショップ10年の歩み』に成果がまとめられた。昨今各地に普及している参加型子どもオペラとそのワークショップに大きな先鞭をつけた事業である。

仙台では2年前の東日本大震災の復興に向けての催しが音楽を含めて多数開催されているなか、仙台オペラ協会が第38回公演として《こうもり》を訳詞（古澤利人）上演した。前年のモーツァルトでは歌唱力が少々おぼつかなかった何人かの歌手たちも、《こうもり》ではまずは破綻なく歌いこなすことができ、佐藤淳一（アイゼンシュタイン）など

同会所属の歌手たちが、4人の客演歌手とともに活気ある舞台を展開、オペレッタの喜劇的雰囲気を楽しませることに成功した。演出（梶賀千鶴子）が華やかに、思い切り明るさを強調した路線だったことも効果的。ただ劇中の踊りが作品にそぐわないことや、歌と管弦楽（仙台フィルハーモニー管弦楽団）のテンポがしっくりこないことなど、改善の余地はあろう。指揮は本多優之。

震災で延期されていた（公財）仙台市市民文化事業団他による三善晃作曲《遠い帆》の新演出（岩田達宗）による公演が、慶長遣欧使節出帆400年記念として実現。これは翌2014年に東京公演された。また、宮城県名取市で名取市文化会館15周年を祝って5都市共同制作の《カルメン》が開催され、名取市初のオペラ公演が実現した。東京芸術劇場の項で記したプロダクションだが、県内から仙台フィルハーモニー管弦楽団、仙台放送合唱団、NHK仙台少年少女合唱隊らが出演し、大きく盛り上がったと伝えられている。